

復元された土塁上の清明台(本丸部の北西隅)

本多正純による 宇都宮城の 大改修と 城下町の整備

現在の宇都宮は、
どのような
成立してきたか



栃木県考古学会顧問 埴 静夫

現在ある宇都宮の基礎を造りあげた本多正純は、歴代城主の中でもまれにみる名君だった。しかし、時の権力闘争に巻き込まれて失意の内に宇都宮を去った。今も語りつがれる「宇都宮釣り天井事件」は権力者だったゆえの伝説である。

宇都宮入部以前の 本多正純

元和五年(一六二九)一〇月、奥平忠昌が古河へ転封(国替え)になると、代わって小山三万三〇〇〇石から宇都宮二万五〇〇〇石という一躍有数の譜代大名として入部したが、本多正純(二五六一―一六三七)である。さらに父正信に付されていた三河高橋衆七〇騎と根来組同心二〇〇人をも組み入れて支配することになった。

しかし、忠昌が古河へ移されたことについて、忠昌の祖母龜姫(家康の娘)は大いに

に不満であったので、これが後々にも尾をひき、正純の前途に暗く重くのしかかって来ることになるのである。

正純は、永禄八年(一五六五)、徳川家康・秀忠將軍に仕えた本多正信の長男として三河国に生まれ、幼少のころから家康の小姓(將軍身邊の雑用に従事)として仕え、その才幹をもつて愛された。慶長六年(一六〇二)には、従五位下上野介に任じられている。

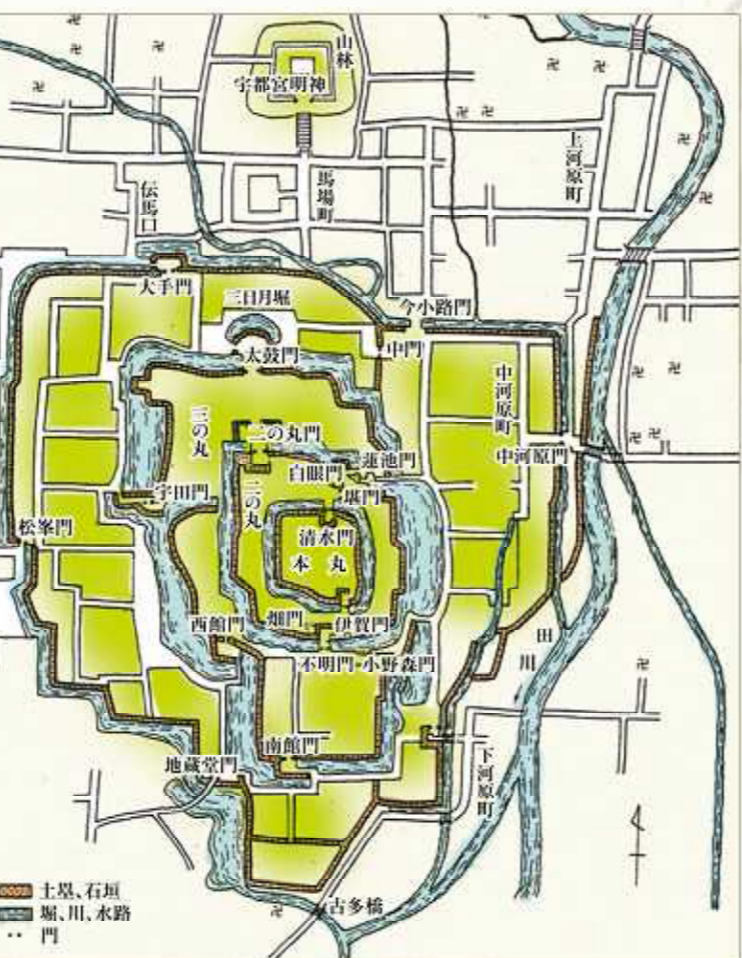
家康は慶長一〇年(一六〇五)、將軍職を秀忠に譲り、二年後に駿府城へ隠居すると、酒井忠世・大久保忠隣・土井利勝

らは、家康から離れて秀忠の幕僚として仕えたが、本多正純は、ひとり家康に仕え、駿府城の二の丸に住んで、家康の信望を一身に集め、家康の大御所政治の中心的人物として、秀忠を取り巻く幕僚以上の実力者として手腕を発揮した。とくに外交・貿易面での権限は絶大であったので、当時の外国人の覚え書きに、「外交内政顧問会議議長」と記されている。加えて正純は多能多彩で頭腦明晰、切れ味のよい武将であったから、幕僚たちの正純に対する敵対心は強いものがあつた。また、正純は家康が豊臣氏を滅亡に追いやつた大坂夏の

陣(一六二五年)のさいには、大坂城の内堀埋め立てを指揮したり、同年、幕府が諸大名統制のために制定した武家諸法度に関与するなど、大変な実力者であつた。

家康は死期が近づくと、枕元に天海僧正・金地院崇伝・本多正純らを呼んで、「遺体は久能山(静岡)に埋葬し、一周忌後は日光山へ改葬せよ」と遺言したという。家康が死去(一六二六年四月七日)した翌年、正純は家康の靈柩を久能山から日光山へ遷すさいに、駿府の財宝を処分するときに、これをすべて指図し、さらに日光東照社(のち日光東照宮に改称)の造営

を奉行し、奥の院の廟塔造営にかかわつた。家康の柩は、正純らに守られて久能山を出発し、正純の所領となつた佐野の神威に一時安置され、ここから日光山に運ばれ、奥の院の廟塔(宝塔)に納められた。「天下無双の聖地」誕生に果たした正純の功績は大きい。



17世紀後半ごろの宇都宮城図

にあつた)前から下河原の亀井の水(常念寺前)のところを北上し、中河原・上河原へと向かい、城の東側を通つてい

また、日光街道は不動堂前(不動前)から台地の東縁を、松が峰・池上の旭坂上へと北上していった。

この奥州・日光の両街道を西方へ移し、現在の不動前辺りから北へ向かうようにつけ替え、西原・鶴田村などよばれていた地区を新たに開削して、この街道に沿つて南新町・熱木・歌橋・大黒・蓬菜・茂破・挽路・材木・新石・伝馬・池上などの新町を新たに開いた。そして伝馬町で北に折れて本郷町・新田町を通つて北へ向かう日光街道が開かれたので、ここで奥州街道と日

宇都宮城の 大改修と町割り

本多正純が宇都宮城主であつたのは、元和五年一〇月から同八年(一六三二)八月までの僅か三年弱という短い期間であつた

が、この間、積極的な領国経営にあたり、着任した翌六年、まずは宇都宮領内の総検地を行い、次いで宇都宮城の大改修とそれに伴う城下の町割り(計画的な町区画)や、奥州街道のつけ替え、日光街道の整備などを行つたので、現在の宇都宮の町並みの骨格は、このころに形成されたといつても過言ではない。

正純が着任するまでの宇都宮城の城域は三の丸までで、これまで城の外堀であつた百間堀・西館堀・南館堀・蓮池堀などの外側に、新たな外堀を巡らして、城域を二倍以上に拡張した。つま

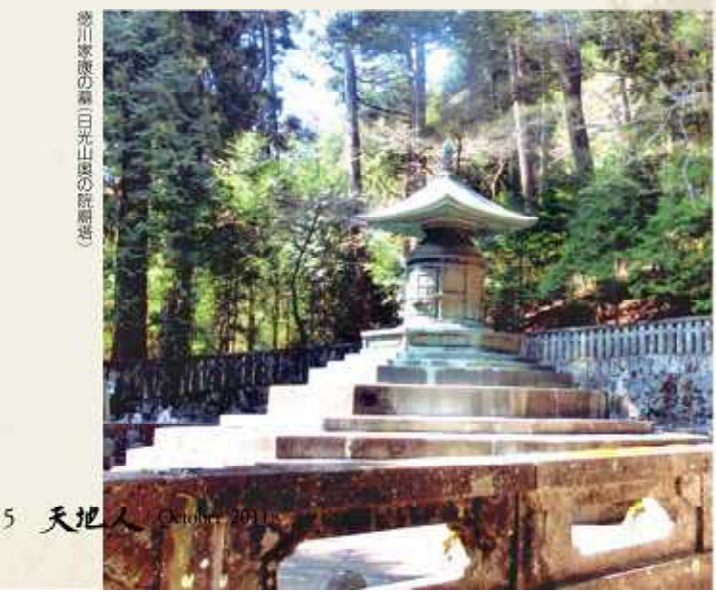
り、東は田川西岸まで、北は釜川岸まで、西は松が峰外へ新たに土塁・空堀を設け、南は不動前まで外堀と土塁を拡張した。そして堀の内外に武家屋敷を造成した。また、宇都宮明神の南方、釜川を渡つたところにあつた城の大手門(正門)を、ここから西方にあたる江野町口へ移し、周辺に石垣を築き、さらに三の丸太鼓門の前に、多くの人夫を動員して三日月堀を新しく普請した。これは大手門から太鼓門に入る防備強化のためである。

これらの大改修工事は、宇都宮城が將軍の日光社参時に、宿城となつていくことによるものであろう。

正純の大改修は城下町にも及んだ。正純が入部する以前の江戸から奥州へ向かう街道は、不動堂(当時は現在地の東方



本多正純入部まで、古い奥州街道は「亀井の水」の湧きを北上していた



釜川家康の墓(日光山奥の院前庭)



「不動前」の由来となった現在の不動堂

光街道は分岐した。奥州街道は伝馬町から現在の大通りを東進して、鉄砲町通りから曲師町・日野町をへて上河原に至るようになった。

また、宇都宮明神の白が峰と下之宮の荒尾崎は丘陵でつながっていたので、丘陵を切り崩して、明神前から千手町までの切り通しをつくって、上町と下町との通行を便利にした。

この地域の拡張・町割りに伴い、城郭内や近辺にあった寺院は、町並み郊外に移転させられた。例えば、城内松が峰にあった桂林寺を日光街道沿いの現在の清住へ、中河原にあった成高寺を現在の塙田へ、城内にあつた応願寺は現在の宿郷町へ移転した。

こうして、正純による宇都宮城の大改修と城下の町割りなどによって、近世宇都宮城下町が整備され、今日の宇都宮中心市街地の骨格が形成された。

一〇日、子の正勝は三五歳で病死し、七年後の同一四年（一六三七）三月一〇日、正純は出羽横手の配所で七三歳の生涯を閉じた。横手城跡（横手市城山町）の南東の一角に、「本多上野介墓」碑があり、位牌は正平寺（横手市田中町）にある。

改易された背景

本多正純は城地接収後、領国宇都宮に戻ることもなく、接収出先で改易されたので、その無念さは計り知れないものがあったろう。

將軍秀忠三度目の日光社参が実施され、



松が峰から移転した桂林寺の清住一丁目

本多正純、城地接収先で改易

さて二代將軍秀忠は、元和八年（一六二二）四月一三日、家康七回忌法要に臨むため江戸城を出発し、一五日宇都宮城に宿泊、一六日日光に着いた。一七日の法要を済ませたのち、日光からの復路、宇都宮城に宿泊する予定を急遽変更し、今市から鹿沼、壬生を経由して、二二日江戸城へ帰った。

ところが、同年八月上旬、正純は幕府から山形城主五七万石最上義俊の城地を接収するよう命じられた。そこで正純は、家臣のほか領内から徴発した人足を加えた三〇〇〇余人を従え、八月中旬宇都宮を發ち、九月には無事その任を果たし、幕府からの指示を待っていた。そこへ一〇月一日、秀忠側近の使者伊丹康勝らが訪れ、「將軍家への奉公宜しからざるに於て、宇都宮一五万五〇〇石を召し上げ（接収）、出羽国由利郡内五万五〇〇〇石を与える」という国替えを伝えられた。この寝耳に水の国替えに驚いた正純は、「ご奉公に疎かなる節など毛頭ない故、五万五〇〇〇石は返上する」と使者に伝えた。

出羽国大沢郷（現大仙市）に配流した。そして寛永元年（一六二四）一月には、正純の身柄を久保田城主佐竹義宣に預け、さらに同年五月には大沢郷から横手城裏手の上根岸に移し、同三年（一六二六）四月、幕府は「本多正純父子の監守を嚴重にせよ」と佐竹義宣に厳命した。そして数年後の同七年（一六三〇）五月



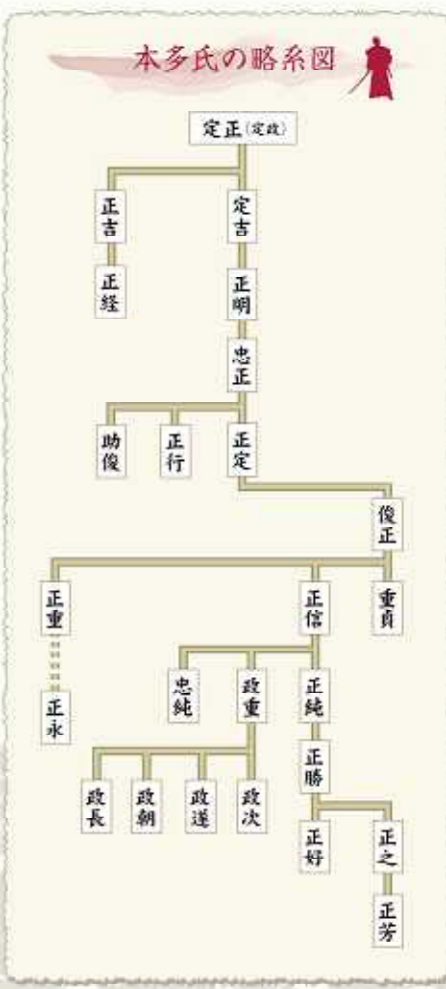
「本多正純の墓石」と位牌のある「正平寺」の位置図（横手市）
写真右／「本多上野介墓」と刻む本多正純の墓碑（横手市）



日光からの帰途、突如宇都宮城への宿泊を取りやめ、急ぎ江戸城へ帰還したことから、正純が將軍暗殺を謀り、宇都宮城に特別の仕掛けをしたとの風聞が取りざたされた。名城に伝説はつきものだが、これが後に潤色されて、真しやかに講談や芝居などで広く喧伝されたのが、伝説「宇都宮釣り天井事件」である。

城下町の整備

徳川家康の御所政権のもとで、権勢並ぶものもない程であった正純も、家康の死去とともに急速に凋落の道をたどることとなった。加えて常に正純を養護してくれた父正信も、家康より五〇日ほど遅れて七九歳で没したので、江戸城に戻った正純は秀忠政権下で孤立し、台頭した土井利勝との緊張関係から、きわめて不安定であった。そしてついに正純を、宇都宮



日光奥州街道の分岐点（左方日光街道、右奥州街道）